

# 指導資料

# 特別支援教育 第192号

鹿児島県総合教育センター  
平成29年10月発行

対象	幼稚園 小学校 義務教育学校
校種	特別支援学校

## 知的障害のある子供の平仮名読みにつなげる指導

知的障害のある子供に対して、ただ単に平仮名の読み方を教えるだけでは、子供が平仮名の読みを効果的に学ぶことは難しい。平仮名を読めるようになるために必要な話し言葉の理解と表現、音韻意識、視知覚能力の育成について紹介する。

### 1 はじめに

このような経験はないだろうか。「平仮名の読み書きができるようになってほしい。」と考え、図1のように、教師が知的障害のある子供にりんごの絵カードを見せながら「りんご」という読み方を教え、復唱させる。しかし、なかなか平仮名を読めるようにならない。そして、同じことを繰り返すうちに、絵カードに対する興味も薄れ、うまく学習が進まなくなってしまう。

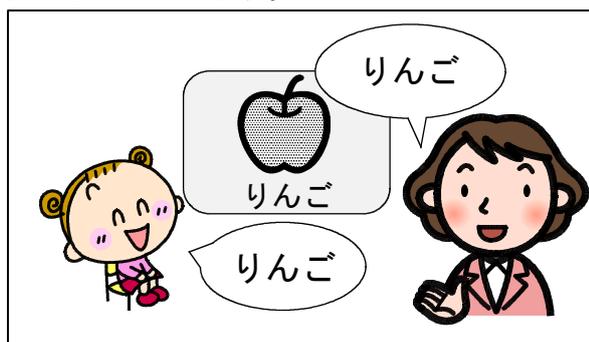


図1 平仮名の読みの指導例「絵カードによる読みの指導」

平仮名を読むということは、国語科のみならず、全ての学習の基礎になるものである。「子供が平仮名を読めるようになる」ということは、保護者や担任にとって大きな願いである。平仮名を読むことができるようになるために適切な指導を行うことが必要である。

### 2 平仮名を読むことができるようになるために必要な指導

まだ十分に話し言葉を理解したり、話したりできない子供に、図1のような指導で平仮名の読みを教えても、意味が分からない、学習した平仮名しか読めないということが生じる。そのような子供に対しては、絵カードで、ただ平仮名の読み方を教えるだけでなく、次のような力を育成する指導が必要である。

#### (1) 話し言葉の理解力と表現力

教師とコミュニケーションがとれ、多語文による指示を理解して、指示に応じた行動や、二、三語文程度の言葉で自分の意思を伝えられるなどの力。

#### (2) 音韻を意識する力

言葉がいくつの音に分かれているか、どの音がどのように並んでいるかなどが分かるといった音韻を意識して聞く力。

#### (3) 視知覚能力

色々な形や空間などの視覚情報を理解する力。

など

(1) 話し言葉の理解力と表現力の育成

平仮名を読めるようになるには、言葉によるコミュニケーションがとれるなどの力が必要である。

中川 (2013) は、子供の「ことばの発達」について、「ことば (音声言語の表出) のみに着目しがちだが、言語表出以前に押さえるべきポイント」を述べている。「毎日の生活の中で、豊かな体験を重ねる中で自然に言語理解を進める」ことや「言えることばを増やそうとする教え込みより、伝えたい気持ちをしっかり教えるのが先決である」ということである。そのために、「周りの大人が良い聞き手、上手な遊び相手になること」などを中川は訴えている。そして、これらを「ことばのビル」として整理している (図2)。

このことから、平仮名を読めない子供に対して「読める平仮名を増やす」ことに焦点を当てるのではなく、体や心を含めた発達の全

体を促す指導を大切にし、規則正しい生活や体を使った楽しい遊び、豊かな体験や経験などを通して他者に伝えたいという気持ちを育みながら、言葉を育てていく必要がある。

子供は人と関わる中で言葉を聞き、話すという経験を繰り返して言葉を身に付けていく。そのため、学校生活全体において体や心の発達を促し、言葉が分かり、話す経験を重ね、文字への興味・関心を育むことが大切になる。また、教師の関わりも重要であり、教師は子供との関係をつくり、全身を使った遊びなどを通して、教師の行動や言葉に注意を向けさせるようにする。

例えば、子供と一緒にボール遊びをしながら、「ボール、転がしてるね。」「ボール、転がすよ、コロコロ。」などと言葉を交わして楽しく遊ぶ。「ボール」や「コロコロ」などの教師の言葉を、子供が模倣することをねらい、よく聞かせるようにする。そ

うして子供が言葉を理解したり表現したりする力を身に付けることができる。

その際、子供が教師に伝えたいという気持ちを高め、言葉を発するには、子供の実態に応じて楽しく活動できる遊びを用意することが大切である。具体的には、玩具を使った遊びや手遊び歌、遊具遊びなど様々な遊びを子供と一緒に楽しみながら、キャッチボールのように言葉をやり取りして、子供の話し言葉の理解や表現を促したい。

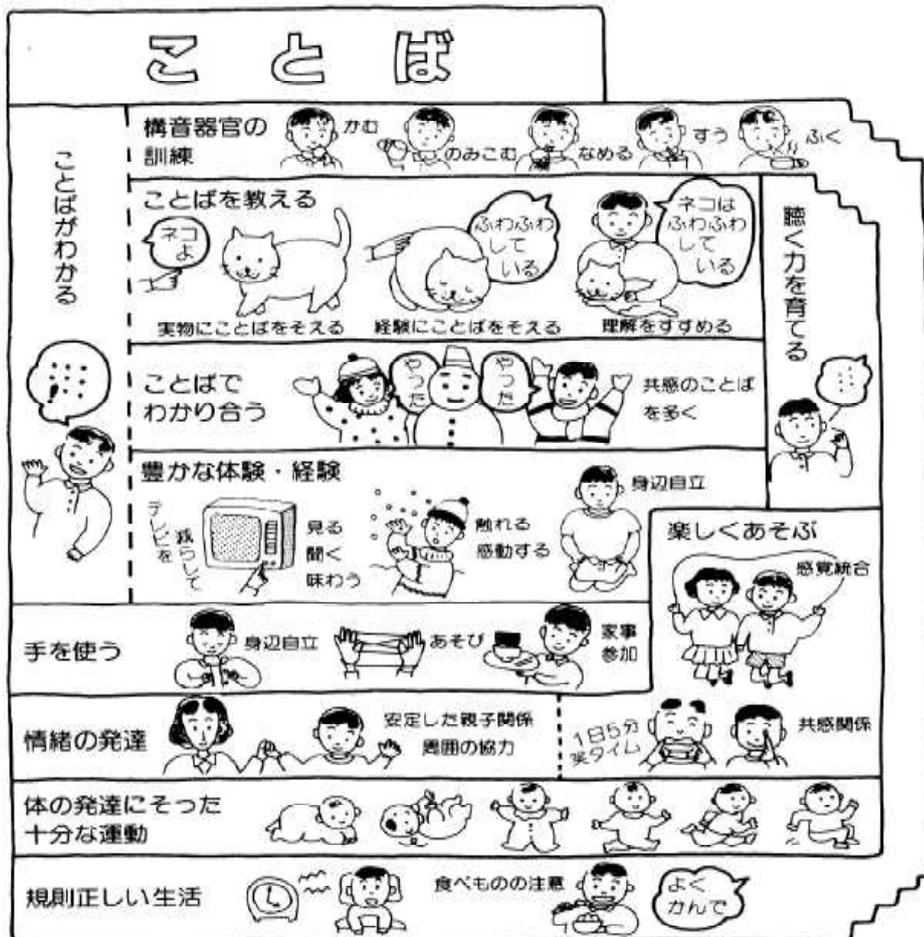


図2 「ことばのビル」 (中川信子, 2013)

## (2) 音韻を意識する力の育成

「ことばのビル」で示しているように、子供は、日常生活の中で色々な言葉を聞いて、まねしながら、次第に言葉が分かるようになり、自らも話し言葉として使うようになる。そのような中で、一般的には4歳前半から後半頃に音韻意識が身に付いていく。音韻意識とは、言葉を聞いて、その言葉がいくつの音で成り立っているかを音節に分解できたり、一番最初の音が何であるか抽出できたりするものである。平仮名を読めるようになるには、話し言葉を理解したり、表現できたりするだけでなく、音韻意識が備わっていることが必要である。

言葉を獲得する初期段階は、一つの言葉の音を一つのまとまりとして捉え、そのまとまりと物や意味を結び付けて理解している。子供の音韻意識の状態は、1音に対し手を1拍叩くことができるかどうかを把握する方法などで確認できる。

例えば、図3のように「りんご」という言葉の場合、「ri/n/go」という三つの音からなり、文字で表す場合は三つの文字で表す。そのため拍は3回になる。しかし、「ringo」という一つのまとまりや、「rin/go」という二つのまとまりで理解していることがある。

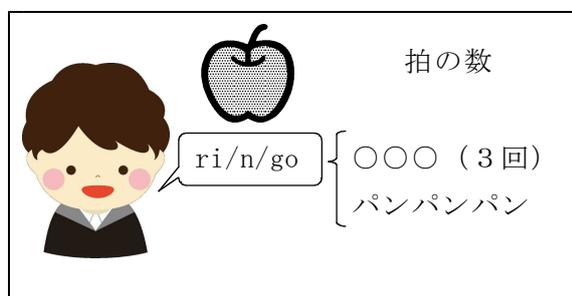


図3 音韻意識と拍

このような場合、音をよく聞くことや、1音に1文字が対応していることの理解を促すことが必要で、例えば、次のような指導が考えられる。

### 【音・声遊び】

- ① 聞こえてくる音の場所当て遊び。  
どこから音が聞こえてくるのかを当てる遊び。
- ② 音当て遊び。  
日常生活で聞いたことのある身近な音を当てる遊び。
- ③ 声当て遊び。  
友達や先生の声聞かせて、誰の声を当てる遊び。

など

### 【聞き分け遊び】

- ① 言葉の聞き分け遊び  
絵カードを並べて、教師が話して指示したカードを取る遊び。
- ② 音節遊び  
絵カードを見て、その名称を言いながら、音の数だけ手を叩いたり、歩いたりする遊び。



音節遊びでは、絵カードと○○を示しながら『「ねこ」の「ね」は、どこかな。』と尋ねて一音に一文字があることを意識させることもできる。

など

他にも、「じゃんけんをしながら、チョコレートやパイナップルと言いながら、その数だけ進む遊び」や絵・平仮名カードを用いて「しりとり遊び」を行ったり、「○（平仮名一文字）が付く単語集め遊び」などを行ったりして、遊びを通して楽しく音韻意識を身に付けていくことができる。

### (3) 視知覚能力の育成

平仮名を読むには、書かれているものを見て、ただの線や点の集まりではなく、何らかの形であると認識する力や、見ているものの空間的な位置を認識する力などが重要になる。そのようなものを含む視覚情報を理解する機能を視知覚と言い、文字を認識するには、次のような力が必要になる。

- ・ 図と地を区別して見る力。
- ・ 形を認識して、同じ形や違う形ということが分かる力。 など

例えば、図4は、注目する場所によって見えるものが異なる。黒い部分に注目すると四角が並んでいる白黒模様のように見える。また、白い部分に注目すると文字が見えてくる（田・日）。また、白い部分を文字だと認識するとともに、それぞれが異なる形だということが分かることも必要である。



図4 白黒模様と文字

日常生活の中で見ることを促すことは大切になる。教師が玩具を提示することや指さすこと、型はめや絵の間違い探し遊びをすることは、見ることを促すことにつながる。また、散歩中に「木の上に鳥がいるよ。」「赤い花が咲いているよ。」など子供に話し掛ける



図5 日常生活における「図と地を見分ける」経験

ことがあるが、ただ話し掛けるだけでなく、見ることを促し、見ていることを確認することが大切である。学校生活の中では、物の選択や指示したものを取る場面が多くある。形や色の違いを見分ける力を育てることを意識して、しっかり見ることを促すようにしたい。

### 3 おわりに

ある特別支援学校小学部のA児は、教師の模倣をしたり、多語文による話し言葉の理解や自分の思いや考えを話したりできるが、平仮名への興味がみられなかった。ある日、自分の名前の一文字が壁の掲示物の文字と同じだと気づき、「同じ、同じ。」と満面の笑みを見せた。そして、他の文字についても「あれは何。」と聞くようになり、平仮名に対する興味が高まり、机上での読み書き学習にも取り組めるようになった。教師が絵本の平仮名を指さしながら読むと、A児も正確ではないが、真似をして平仮名を指さしながら読むようになり、少しずつ平仮名を読めるようになっていった。

平仮名を読めるようになることは、子供や保護者、教師にとって共通の願いである。人との関わりを大切に、様々な事物への興味・関心を育てながら、子供の「言葉で伝えたい」、「平仮名を読めるようになりたい」という意欲を高めながら、必要な力を身に付けていく指導が求められる。

#### —引用・参考文献—

- 中川信子『子どものこころとことばの育ち—親子を共に支援するために—』平成25年日本小児耳鼻咽喉科 vol. 34 [https://www.jstage.jst.go.jp/article/shonijibi/34/3/34\\_234/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/shonijibi/34/3/34_234/_article/-char/ja/) 平成29年10月2日アクセス
- 河野俊寛『知的障害児への文字の読み書き指導研究の動向』平成26年金沢星稜大学人間科学研究第8巻1号
- 奥村智人・若宮英司編著『学習につまずく子どもの見る力』平成28年明治図書（特別支援教育研修課 川田 耕太郎）